



世界名著日语

导读

中英文注释

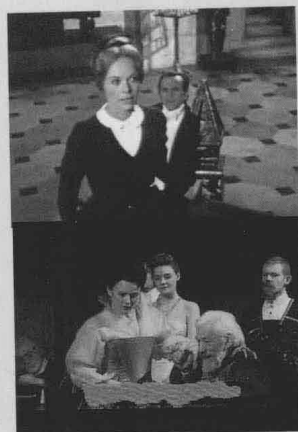
SHIJIE MINGZHU RIYU DAODU

高长峰 / 主编



ZHEJIANG UNIVERSITY PRESS
浙江大学出版社

中英文注释



SHIJIE YINGZHU RYUYAN DUDU

世界名著语言导读

常州大学图书馆藏

● 高长峰 主编



ZHEJIANG UNIVERSITY PRESS
浙江大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

世界名著日语导读：中英文注释 / 高长峰主编. —
杭州：浙江大学出版社，2011.7

ISBN 978-7-308-08798-8

I. ①世… II. ①高… III. ①文学欣赏—世界—高等
学校—教材—汉、英 IV. ①I106

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2011)第 119846 号

世界名著日语导读：中英文注释

高长峰 主编

-
- | | |
|-------|--|
| 责任编辑 | 张作梅 (zhangzmei@sina.com) |
| 封面设计 | 张作梅 |
| 出版发行 | 浙江大学出版社
(杭州市天目山路 148 号 邮政编码 310007)
(网址: http://www.zjupress.com) |
| 排 版 | 杭州好友排版工作室 |
| 印 刷 | 杭州丰源印刷有限公司 |
| 开 本 | 710mm×1000mm 1/16 |
| 印 张 | 12.50 |
| 字 数 | 268 千 |
| 版 印 次 | 2011 年 7 月第 1 版 2011 年 7 月第 1 次印刷 |
| 书 号 | ISBN 978-7-308-08798-8 |
| 定 价 | 32.00 元 |
-

版权所有 翻印必究 印装差错 负责调换

浙江大学出版社发行部邮购电话 (0571)88925591

主 編：高长峰（湖州师范学院外国语学院）

編 委：周凯发（湖州师范学院外国语学院）

岡 猛（大阪文化国际学校）

王 瑜（湖州师范学院外国语学院）

李今顺（大阪文化国际学校）

Mark Weich (Quesnel, British Columbia, Canada)

本書の出版にあたって、大阪文化国際学校の岡猛校長、李金順
センター長、Mark Weich 監督にひとかたならぬご指導、ご協力をいた
だき、ここに深く感謝申し上げます。

さらに、多くの方々のご声援くださることを切にお願い申し上げ
る次第である。

Preface

文学是语言的艺术，一个国家及民族的优秀文学作品无疑是其语言最精华的部分。不言而喻，这一命题自然也适用于解释任何语言与文学的相互关系。学习外语自然离不了发音、会话、语法等过程，但这仅仅是基础训练过程，是最基本的语言知识阶段。当学习者具备了一定基础，并希望进一步提高自己的水平，最有效的方法就是有选择地阅读大量的文学作品，即博览群书。在我国学习日语有两个致命的弱点，其一，学习缺乏渐进性。学生们常常以为，阅读写满生词和语法的课本收获最大。其二，阅读量少。据统计，近年来在国际能力考试中得分最低科目就是阅读。结果经过多年的努力之后才发现，自己的水平十分令人尴尬。在大学里学到的除了几千个生词和基础语法等已成熟的语言知识以外，无真正的知识可言。

首先，人文知识作为人类知识结构中不可或缺的重要组成部分，对构建和谐社会和人类精神文明具有重要的意义。歌德认为：“The decline of literature indicates the decline of a nation: the two keep in their downward tendency.”（文学的衰落表明一个民族的衰落；这两者走下坡路往往是齐头并进的。）近年来，在功利主义的影响下，大多数人只关注马上就能派上用场的知识，而不喜欢读人文知识。奥利弗·温德尔·霍姆斯说过：“Life is painting a picture, not doing a sum.”（生活是绘画，而不是做算术。）殊不知，虽然人文知识并不一定立刻见效，但它所潜藏的深刻的智慧和力量是无穷无尽的。其次，日本文学作品已在国内市场随处可见，但是真正读懂日本文学内涵的读者却寥寥无几。其原因在于，缺乏了解世界文学对日本文学的影响。通过阅读世界名著日语导读，读者可以深层次

地了解日本人解读世界文学的方法，同时提高日语阅读能力。而且这对今后解读日本文学的内涵，也将大有裨益。比如《简·爱》的无私境界；《约翰·克里斯朵夫》的勤奋精神；《红与黑》的社会公正；《李尔王》的忠诚；为何被视为日本式无私、勤奋、公正、忠诚，只有通过反复阅读和思考才能得到其答案。另外，大多数日语学习者也曾读过中文版的世界名著，但是读过日文版世界名著的人为数甚少，与日本人交谈世界名著时，经常遇到语言障碍，道不出自己的观点暂且不说，就连小说的名称、作家以及主要人物的日文名称都道不上来。这使日本人误认为，中国人缺少人文知识，从不阅读世界名著。除此之外，近几年对日语爱好者来说，二外成为就业的法宝。即精通日语又熟练掌握英语的学生容易就业，拿高薪。所以，本书大量引用了名著的英语原文并有中文注解，使读者掌握日语的同时，又有助于掌握英语，可谓一箭双雕。

本书的主要对象是日语专业学生，以及把日语作为二外的学生，从事日语教学的教师及翻译工作者等。内容主要以英法文学名著为主，并收入了作家与作品、主要人物、小说简介、名句欣赏等内容。因考虑到阅读理解的难度和缩短读者的阅读时间，编者割舍了不少长篇佳作。但仍然保留了主要人物的外观特征、性格、心理活动以及自然景观的描写部分，以突出世界名著的文学特点。因此本书的内容，可谓囊括了“日本文学”所无法比肩的文学领域。因为日本文学的特征，并不在于语言表达技巧和华丽辞藻上，而是在于它的思想深度和境界之高度上。正因为如此，编者认为有必要向广大读者提供《世界名著日语导读》（中英文注解）。读者即使没有阅读过原著，但通过阅读名著导读，进而产生对原著一读为快的想法。比如电影，其实也只是一个故事梗概。但是，电影有时会比原著更能够感动人。当然，编者并不是想把故事梗概和电影相提并论，而是强调阅读名著的故事梗概也能唤起人们的感动。希望广大读者朋友能够通过本书对世界名著产生兴趣，能提高日语阅读能力的同时，也能巩固和提高英语水平，那将是编者最大的欣慰。

由于编者水平有限，错误之处在所难免，恳请读者提出宝贵意见。

高长峰

2011年5月

目
录

Contents

一 『ジェーン・エア』 / 《简·爱》

(一) 作家与作品	001
(二) 主要人物表	002
(三) 小说简介	003
(四) 中英文注解: Chapters 1 ~ 13	026
(五) 名句欣赏	057

二 『赤と黒』 / 《红与黑》

(一) 作家与作品	061
(二) 主要人物表	062
(三) 小说简介	064
(四) 中英文注解: Chapters 1 ~ 10	081
(五) 名句欣赏	108

三 『ジャン・クリストフ』 / 《约翰·克里斯朵夫》

(一) 作家与作品	112
-----------	-----

(二) 主要人物表	113
(三) 小说简介	114
(四) 中英文注解: Chapters 1 ~ 6	127
(五) 名句欣赏	148

四 『リア王』 / 《李尔王》

(一) 作家与作品	152
(二) 主要人物表	153
(三) 小说简介	155
(四) 中英文注解: Chapters 1 ~ 7	167
(五) 名句欣赏	182

五 参考文献 188



ジェーン・エア

(ブロンテ1847年発表)

作家と作品

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Bronte, 1816~1855) はアイルランド出身の牧師の長女で、妹のエミリ、アンと共に「ブロンテ三姉妹」と呼ばれる。姉妹三人が一国の文学史に名をつらね、しかもそのうちの二人までが不朽の名作を書き残しているということは、英文学史のみならず、恐らく世界でも類例がないのである。三姉妹の中で一番美しかったのはエミリだが、一番おしゃべりだったのはシャーロットだったという。とは言っても、二人の姉妹たちと比較してのことで、一般的に言うと、むしろ無口に近い方で、この家族に共通の孤独な性格を、彼女もまた持っていた。絶えず絶望にさいなまれている暗い、悲劇的な性格だったが、それを支えたのは彼女の不屈の意志力と宗教への深い信仰であった。1824年、ブリッジ校に妹エミリと共に入学する。その学校は施設・教育ともに悪く、マリアとエリザベスは、学校の不衛生のため肺炎にかかって死亡。この学校は、シャーロットのローウッド学院のモデルである。その後、エミリと共にブリュッセルへ留学。帰国後、塾を開くが、入塾希望者は現れなかった。1846年、三姉妹共同の『詩集』を出版するが、二部しか売れなかったため、三人は小説を書き始める。父の看病の合間に『ジェーン・エア (Jane Eyre)』を執筆し、社会に反抗する同名の主人公は大反響を呼び、その名を広く知られるようになった。しかし翌年、弟が死亡し、年末にエミリも死亡。さらに翌年にはアンも倒れ、わずか二十九歳で没した。1854年に牧師と結婚したが、妊娠中に発病し、『エ



マ』を未完のまま死去した。三姉妹の中で最も長く生きたが、それでも三十歳の若さであった。

この小説は女性の激情を真正面から描写しているが、これは当時の文学的、社会的通念からすれば、驚くべき横紙破りであった。女性の感情を、このように赤裸々に曝け出すというようなことは、当時の常識では考えられなかった。また二人の主人公が、いずれも美女美青年でなかったことも、破格なものであり、当時の価値観を根本から覆している。「孤児であることに対する不満、私は、決してあなたを伯母様と呼ばない。二度とここに来ないし、人に聞かれたら、どんなに残酷に扱われたかを言いふらしてやる」という反骨精神を描き、「ときどき、私は遠くを眺め、より多くの経験をしたいと思った。女も男と同じく能力を発揮する分野を必要としているのだ」という男女平等意識を主張し、また女性から愛を告白する。「私を人形だとお考えなのですか？感情も持たぬ機械だとお考えなのですか？そして、口からパン切れを奪いとられ、コップから、命の水をこぼされても、なおかつ、我慢していられるとお考えなのですか？私が貧乏で、名もない身分で、ちっぽけな女なので、魂もなければ、愛情も持たないと思ったのですか？私もあなたと同じように魂を持ち、愛情を持っているのです。もし神様が私に、美しさと相当の財産を恵んで下さっていたら、いま私があなたとお別れするのをつらいと思っているように、あなたにも、私と別れるのをつらいと思わせることができたでしょう。これはあなたにお話しているのではなく、あなたの魂に話しかけているのです。平等に、ありのままに！」ということも、当時の社会常識から逸脱した行為である。財産や身分にとらわれず、自由恋愛という形で結婚するという点は、ヴィクトリア期の文学において画期的であった。

登場人物

- ジェーン・エア : (Jane Eyre, 簡・愛)
美人ではないが、確固たる意思を持つ女性。
- ロチェスター : (Edward Rochester, 罗切斯特)



- ジェーンの思い人。
- リード夫人 : (Mrs. Reed, 里德舅妈)
亡き夫に頼まれているが、ジェーンを嫌っている。
- テンプル先生 : (Miss Temple, 丹伯尔小姐, 学監)
- イングラム婦人 : (Lady Ingram, 英格姆夫人)
未亡人、年齢は四十前後。
- フェアファックス : (Mrs. Fairfax, 费尔法斯太太)
家政婦だが、十分な教育を受けた婦人。
- イングラム嬢 : (Blanche Ingram, Mary Ingram, 英格姆小姐)
ひとときわ美しかったが、高慢である。
- セント・ジョン : (St John Rivers, 圣・约翰牧师)
ジェーンの従兄、メアリとダイアナの兄。
- アデル : (Adele, 罗切斯特的法国情妇的女儿/阿黛拉小姐)
パリの愛人が産んだ子。
- ダイアナ : (Diana Rivers, 戴安娜)
セント・ジョンの妹。
- メアリ : (Mary Rivers, 玛丽)
セント・ジョンの妹。
- エリザベス : (Eliza Reed, 伊莉莎・里德)
ジェーン・エアの従姉妹。
- ジョジアーナ : (Georgiana Reed, 乔治娜・里德)
ジェーン・エアの従姉妹。
- ジョン・リード : (John Reed, 约翰・里德)
ジェーン・エア従兄妹。
- ベッシー : (Bessie, 贝茜)
- ヘレン・バーンズ : (Helen Burns, 海伦・庞丝)
- グレイス : (Grace Poole, 格丽丝)

あらすじ

その日は、散歩などとてもできそうもなかった。事実、朝のうちは、



一時間ほど、木の葉の落ちた林を歩きまわったけれど、昼食後冷たい冬の風が、うっとうしい雲を吹きよせ、染み入るような雨が降り出したので、これ以上散歩を続けるのは、もうどだい無理だった。外は、冬の荒涼たる風景が嵐に吹きたてられていた。暖炉の前に三人の従兄妹^①が幸せそうに母親を取り囲んでいる。夫人は私を仲間はずれにしていた。その言い分は、私を遠ざけておかなくてはならぬのは残念だけれど、私をもっと愛想のよい、子供らしい性格で、人をひきつける、はきはきしたところのある、いわば、もう少し気軽な、あっさりした、素直な子供になろうと、本気で努力していることを、彼女自身の目で見るとなりしないかぎりには、不平を言わぬ快活な子供だけが受ける特権を、私に与えるわけにはいかない、というのであった。私だけは客間の隣にある、小さな朝食用の食堂へそっと入って行った。その部屋には本棚があった。私はさっそく、挿絵のたくさんついているのを見極めてから、一冊の本を手にとった。出窓に上がると、トルコ人のように足を組んで坐った。それからカーテンを、いっぱい引いてしまって、隠れ家に閉じこもり、その陰^②で本を読んでいた。私は幼いとき両親を亡くしたが、私を引き取った伯父のリード氏は「自分の子同様に育てること」をリード夫人に約束させて亡くなった。リード夫人は、がっしりした骨格に、頑健な四肢、肩がいかつく、背丈はあまり高くなく、太ってはいたが、肥満というほどではなかった。顔が大きく、下顎がよく発達していて、額は狭く、顎は大きく突き出ており、目と鼻は普通に整っていた。薄い眉の下に二つの目が無慈悲に光っており、皮膚の色は、どす黒く濁っていた。髪は亜麻色に近かった。リード夫人は、私を目のかたきにしたため、私はいつも仲間はずれ^③で育ったのである。「きれいならともかく、あんなヒキ蛙みたいな子には誰も同情しないわ」と言われた私は、いまなお、生々しく、ちくちくと私の心を刺していた。その言葉は、いつも私の心に迫り、怒りの感情が燃え盛った。私は、早く家を出て行きたいと思っていた。

リード夫人は十歳の私を遠く離れた慈善学院に入れることにした。怒りを抑えていた私は立ち上がり、ドアのところまで行ったが、もう一度

注①：三人の従兄妹が幸せそうに母親を取り囲んでいる。

注②：カーテンの陰で本を読む。

注③：いつも仲間はずれで育った。



引き返した。部屋を横切って、窓際に歩いて行き、それから夫人の方へ近づいた。私は言わねばならない。私は頭から踏みつけにされた。はねかえしてやらねばならぬ。だが、どうやって？ 私は勇気を奮い起こし、ぶしつけな次の言葉に、それを集中した。「私は、けっしてあなたを伯母と呼ばない。二度とここに来ないし、人に聞かれたら、どんなに残酷に扱われたかを言いふらしてやる」と、この言葉が終わらぬうちから、私の心は、かつて味わったためしのない、不思議な自由と勝利の気持ちで、ふくらみ、はねあがった。この感情も、理由がないわけではないが、後には勝利感より苦い思いが残った。復讐というものを、私は初めて味わった。飲むときは暖かく、さわやかな香料入りぶどう酒のようであった。後味は金気があって、舌を刺すような、まるで毒を飲んだような気分だった。みずから進んで夫人のもとへ行き、許しを乞いたい気持ちでいっぱいだった。数日後の夕方、ローウッド学院に着くと、テンプル先生^①が出迎えてくれた。彼女は、背が高く、美しい容貌と、すらりとした容姿の持ち主であった。優しい光をたたえた茶色の瞳と、描いたように長く揃ったまつ毛が、ひろい額の白さを浮き立たしていた。服装は流行の型で、紫色の布地で仕立てられ、黒いビロードのスペインふうのアップリケのために、たいへん引き立って見えた。帯には金時計が光っていた。彼女の肖像を、より完全にするためには、洗練された容姿と、青白いけれども澄み切った顔色と、威厳のある風采態度とをこれに付け加えるなら、読者は、少なくとも口で説明できるかぎりの明瞭さで、テンプル先生の外観について正確な考えを持つことができるであろう。

学院は高い塀に囲まれ、設備も環境も劣悪で、どの生徒も、無造作にひきつめ髪をしており、褐色の衣服に、田舎作りの靴を履いていた。この服装をした生徒のうち二十人ばかりは、成熟した少女、というよりは、むしろ若い女であった。この服装は、それらの少女たちには、全然似合わなかった。一番美しい娘さえ、おかしい格好に見えた。しかし、みんな規律に従い、五分もしないうちに、乱れていた生徒の群れは、秩序を回復し、やかましいおしゃべりもやんで、かなり静かになった。特に粗

注①：テンプル先生が出迎えてくれた。



末な食事は、八十人^①の生徒を苦しめた。毎朝、顔を洗う儀式は、余儀なくとりやめねばならなかった。水差しの水が凍り付いていたからである。前夜突然天気が変わって、肌を刺すような北東の風が一晩中寝室の窓の隙間から吹き込んできて洗顔用の水差しの水を凍らせてしまったのだ。一時間半にわたる長たらしい祈祷と聖書朗読が終わるまでには、私は寒さで、いまにも死んでしまいそうな気がした。やっと朝食の時間になった。この朝は、お粥は焦げ付いていなかった。どうやら食べられるものであったが、分量が少なかった。私のぶんは、なんとちょっぴりしかないのだろう。この二倍もあったらいいだろうに。その日、私は最下級の組に編入され、正規の学科を決めてもらった。昼食を告げる鐘の音が鳴り響くと、みんな校舎のなかへ入った。食堂にこもっていた匂いは、朝食のとき鼻を打った臭気と、ほとんど変わらぬいやらしいものであった。食べ物は二つの器に盛ってあり、そのなかから、変な匂いのする白い湯気が、もうもうと立っていた。これは質のよくないジャガイモと、腐りかかったような肉の細切れを、混ぜ合わせていっしょに煮た料理であることがわかった。この料理は、かなりたつぷりと皿に盛って、みんなに配られた。私は、できるだけ食べた。毎日の食事がこんなものだろうかと思議に思った。ローウットでは、夜の遊びの時間が、一日のうちで一番楽しい時間であった。夕食にいただく、少しばかりのパンと一杯のコーヒーは、空腹を満たすには足りないにしても、元気を回復させてくれた。長い一日の束縛がゆるめられ、教室のなかは、昼間よりも暖かいような感じがした。

はじめは、慣れない規則や生活習慣^②にとまどった。ローウットへ来て最初の一学期は、まるで一世紀のように思われた。それも、決して幸福な時代ではなく、新しい規則や慣れない学科に自分を慣らすという困難に対して、私は厄介な戦いを続けねばならなかった。先生が言われるように、私はだらしがなくて、ものをきちんと整頓することが、めったにないのよ。私は不注意なのよ。よく校則を忘れるし、学科を勉強しなければならぬときに、ほかの本を読んだりするのよ。ものを組織的に

注①：八十人の生徒を苦しめた。

注②：慣れない規則や生活習慣にとまどった。



することができないのだ。しかし、鍛錬は私の知識を磨き、フランス語も絵画も上級に進めた。ヘレンという友人もでき、不自由でも、今の生活を取り替えようとは思わなかった。春になると、湿気が悪疫のチフスを学院に吹き込んだ。半飢餓状態の生徒たちは伝染しやすく、五十人が一度に病み、五月になる前に学院は病院と化してしまった。幸いチフ스에冒されなかった私は自由^①に遊び、人数の減った分、増えた食事で好きな生活ができるようになった。ローウットが森や丘に囲まれ、私は住むにふさわしい、楽しい場所として描き出したのではなかったろうか？しかし健康に適するかは、また別の問題だった。ローウットの位置していた森の多い谷間は、霧と、霧が生み出す悪疫の発生地だ。霧は、すべてを甦らせる春とともに、この孤児院に忍び込み、人の密集した教室や寄宿舎にチフス菌を吹き込んだ。親友ヘレンは肺病で隔離されていたが、なにも知らない私は、ある晩ヘレンのベッドにもぐりこんで話しこみ、寝てしまった。その夜中、寝ている私の隣でヘレンは死^②んでしまう。まもなく犠牲者の数の多さが世の中に知れ、学院の実態が暴露されて、学院は刷新された。私は生徒として過ごした六年間のうちに首席となり、教師としてさらに二年を過ごすことになった。しかし、慕っていたテンプル先生が結婚して去ってしまうと、決まりきった生活に飽き、自由になりたい^③と思うようになった。私は新聞に広告を出して家庭教師の職を得る。

早朝から駅馬車に揺られて、夜遅くソーンフィールドに到着した私は、留守がちのご主人の代わりに、家政婦フェアファックス夫人^④の温かい出迎えを受けた。彼女は、未亡人帽子をかぶり、黒い絹のガウンをつけ、純白のモスリンのエプロンをかけた、この上もなく清楚な、小柄な老婦人であった。私は、壮大で重厚な建物の中を案内され、部屋に通された。私は、心が浮き立つほど輝かしく、希望に満ちた将来が訪れるように思われた。翌日、器量の悪さを補うために、衣服に気をつかい、壮麗なホールへ下りていった。そこで、半年前にフランスから来たという巻き毛

注①：病に冒されなかった私は自由に遊んだ。

注②：その夜半、私の隣でヘレンは死んだ。

注③：決まりきった生活に飽き、自由になりたいと思う。

注④：フェアファックス夫人の温かい出迎えを受けた。



のアデル^①を紹介された。私の生徒である。フランス語が話せた私は、会話に困らなかった。彼女は勉強が嫌いだが素直な子で、仲良しになれそうだった。彼女は私の膝の上に坐り、巻き毛を後ろに揺さぶりやって、天井に目を向け、あるオペラのなかの歌を、歌い始めた。それは男に捨てられた女の歌で、その女が恋人の不実を嘆いたあげく、自尊心の助けを求め、一番美しい宝石と豪華な衣装で身を飾り立て、ある舞踏会の夜、その愛を裏切った男に会って、楽しそうな態度をみせつけ、男に捨てられても露ほども痛手を受けていないことを思い知らしてやろう、という内容である。この歌の目的は恋と嫉妬の調べが子供の口で歌われるのを聴くところにあるのだろうか、それにしては、ずいぶん悪趣味だと、少なくとも私はそう思われた。アデルは、その歌を、かなり上手に、あどけなく歌った。これが済むと彼女は私の膝から飛び降りて、「さあ、今度は、何か詩を読んで聞かせましょう」と言った。

私は、未亡人に屋敷を案内された。大きな部屋は、とりわけ豪華だと思った。三階の、いくつかの部屋は、薄暗くて、天井が低かったけれど、古風な感じが、面白かった。階下の部屋で使用されている家具が、流行が変わるたびに、つぎつぎに、ここへ運び込まれた。ある日、三階で異様な笑い声を聞いたが、夫人からグレイス^②という召使の声だと説明を受ける。生活は快適であったが、単調だった。ときどき、私は遠くを眺め、より多くの経験をしたいと思った。女も男と同じく能力を発揮する分野を必要としているのだ。こんなことを考えているときにも、例の笑い声を聞くことは珍しくなかった。平和で静かな私の前途は、その後、この場所や、そこに住む人たちに慣れ親しむようになってからも裏切られなかった。フェアファックス夫人は、外見通り十分な教育を受け、人並みの知性を備えた、穏やかで親切な気立てのよい婦人であることがわかった。私の生徒は、甘やかされ、放任されて育った快活な子供で、そのため、ときには、わがままをいうこともあった。けれども、彼女の監督は、一切私に任されていたし、その性質をよくしようという私の計画を妨げるような思慮のない干渉は、全然どこからもなされなかったので、

注①：巻き毛のアデルを紹介された。

注②：グレイスという召使の声だと。



彼女は、間もなく移り気なところがなくなり、素直になり、教えやすくなった。彼女は特別の才能もなければ、性格の上で特に際立ったところもなく、普通の子供のレベルから一インチでも高めるような感情や趣味が、ことさら発達しているということもなかったが、しかしまたレベル以下に引き下げるような欠点も持っていなかった。彼女は、かなりの進歩を示し、その無邪気なところや、気に入ろうとする努力によって、二人の交わりに、お互いが満足しうる程度の愛着を私に起させた。

ある日、冬枯れの道を歩いていたとき、滑る音と、「畜生、なんということをしてくれるんだ！」という叫びと、どうと倒れる音が、私の注意をひいたのだ。私は、犬を連れた旅人^①が氷に足を取られ、馬ごと倒れているのを助けた。家に戻ると、さっきの犬が寝そべっていた。「この犬は？」、「ご主人様は足にけがをしています」召使は医者を迎えにいった。翌日は、使用人たちが事務処理のため、ご主人を待ち受け、館にはベルや戸の開く音、人々の歩き回る音とともに外の世界がながれこんできた。数日後、お茶に呼ばれた私が、精一杯服装を整えて部屋に入ると、暖炉の前には犬とともに、日に照らされて、どちらかといえば不細工で気むずかしげな顔^②があった。私の感じでは、気難しい口もと、下顎、横顎など、すべて見覚えがあった。そうだ、三つとも気難しい感じで、間違いなかった。特に角張っている点で、その人相とよく調和していると私は思った。角張ったというのが、体育上の意味から言えば、よい形であろう。背が高くもなく、優美でもなかったが、胸幅が広く、腰が細かった。そこで、私は数日前の旅人がこの邸のご主人だったことを知ったのである。ご主人は短気で怒りっぽかったが、話好きであった。アデルはパリの愛人が別れてすぐ産んだ子だが、自分の娘とは思っていないという話や、私についてもいろいろ知りたがり、よく話し相手^③に呼ばれた。私に対する彼の態度は、ここ数週間のあいだ、初めてのころに比べて、ずっとよくなってきた。私は彼の邪魔にならないようであった。あのそっけない傲慢な素振りも見せなかった。思いがけず、どこかで顔を合わせても、そのことを喜んでいるふうだった。いつも言葉をかけ、ときに

注①：旅人が氷に足を取られ、馬ごと倒れている。

注②：不細工で気むずかしげな顔。

注③：よく話し相手に呼ばれた。